



巻頭言

研究者のこだわりと 世界が気付く価値

●
中井浩巳 Hiromi NAKAI

早稲田大学理工学術院 教授



「世界的な価値」とは、新たに創り出すものなのだろうか。それとも、もともと存在していた価値に世界が後から気付くものなのだろうか。

筆者は奈良で育った。奈良公園で鹿せんべいを手に鹿と触れ合う光景は、ごく当たり前の日常であり、その特別さを意識したことはなかった。ところが、2017年に公開された、子供が鹿に餌を与えるだけの動画は世界中で大きな反響を呼び、約8億回再生されている¹⁾。筆者には日常の風景が、海外の人々には驚きと感動を与える唯一無二の体験だったのである。もちろん、その価値が突然生まれたわけではない。1000年以上にわたり神鹿として守られてきた歴史、人と鹿が共生する文化、さらに近年明らかになった遺伝的独自性など、長い年月をかけて育まれた価値に、世界が気付いたのである。

筆者は、このことは研究にも当てはまると思う。文部科学省が2023年に公表した「サイエンスマップ2020」²⁾では、研究領域をコンチネント型、ペニンシュラ型、アイランド型、スモールアイランド型の4つ（Sci-GEOチャート）に分類している。日本では新興領域（スモールアイランド型）への参画や、分野融合（ペニンシュラ型）の重要性が指摘されている。一方、4つに優劣はなく、いずれも科学の発展に不可欠である。筆者が重要と考えるのは、価値は、どの研究スタイルにも宿り得るということである。多くの研究者は、新しい研究テーマを考えると、新奇性を追い求めがちである。しかし、新奇性は新しい領域だけから生まれるわけではない。長年磨き続けられた研究を深化させる中にも、世界がまだ気付いていない価値が潜んでいる。

日本には「こだわり」の文化がある。職人は、人には見えない違いを追究し、技を磨き続ける。研究者もまた、それぞれの専門分野で精緻さを追い求め、その積み重ねによって独自の価値を育んできた。その姿勢こそが、日本の化学への信頼を支えてきたのではないだろうか。ただし、価値は存在するだけでは十分ではない。世界へ届け、必要とする人に伝わって初めて価値となる。これまで、その役割は学術論文や国際会議が担ってきた。しかし、価値を届ける手段は時代とともに進化していく。AIを含む新たなデジタル技術は研究者のこだわりを代替するものではない。むしろ、その価値を世界へ届け、多くの人々の「気付き」へとつなげる増幅器となり得る。

研究者に求められるのは、自らの問いに誠実であり続け、その価値を世界へ伝える努力を惜しまないことである。価値を磨く「こだわり」、価値に気付く「視点」、そして価値を世界へ届ける「発信力」。その3つがそろって初めて、新しい化学の地図を描くことができるのではないだろうか。

1) せんもあいしーチャンネル、奈良公園でシカにエサやり Deer Feeding Nara Park, YouTube, 2017年8月17日公開。

2) 科学技術・学術政策研究所（NISTEP）、サイエンスマップ2020—論文データベース分析（2015–2020年）による注目される研究領域の動向調査—, NISTEP REPORT No. 196, 2023.